

2019年1月16日

全復工・全肥商連 合同新年賀詞交歓会 記念講演

演題：「ゆでガエルにならないために」

講師：齋藤健 衆議院議員（前農水大臣）

講演概要：

*初めに農政部長に就任した時、農業には課題が山積みである一方、伸びしろのある産業であると確信した。

人口減少とは、読んで字のごとく人の口が減る即ち食料消費が減るわけで、日本国内を見ると人口減少で将来性が無いように思えるが、世界では爆発的に人口増えておりこの食料需要増を賄う農業は伸びしろのある産業である。これまで日本経済を支えてきた自動車・家電産業などは既に成熟しており、伸びしろがあるとは言えない。

*日本の農産品の輸出先で一番のお得意様は香港である。香港は人口が700万人しかいないが、金額的に最大の輸出先である。700万人のうち、香港から日本にくる観光客は年間200万人もいて、これらの訪問客が日本品のファンになり、香港に戻っても日本品を欲するから日本からの輸出が増えているのである。香港の人は、わざわざ何十万円という旅費を払って日本に試食に来てくれているようなものである。試食して日本食のファンになり、これが日本産品の輸入増につながっているのである。

*日本は2020年東京オリンピック時には4千万人の観光客のインバウンドを目指している。この4千万人が日本食のファンになってくれれば、農産品の輸出は飛躍的に伸びるだろう。このチャンスを逃す手はない。

*但し、日本産品は品質は良いが価格は高いので、何もやらずに売れるものではなく、販売戦略と努力が必要である。米国に行くと、今やキッコーマンの醤油は殆どのスーパーにも置いてある。これはキッコーマンの営業マンが米国全土のスーパーを訪問し商品を紹介・説明するという地道な販売活動をした結果である。

日本の農産物については、残念ながら、これまでこういった販売をやってきたとは言えない。展示会で商品を並べても商品は売れない。消費者に近いところで商品を理解してもらおうよう働きかけなければ商品は売れない。

*環境の変化は、徐々に・しかし確実に進行しているが、その中にいると自分ではわからないものである。カエルは熱いお湯の入った鍋に入れれば大騒ぎするが、水の入った鍋に入れられて熱すれば温度が徐々に上がり気づかずに「ゆでガエル」になるという。

農業も、環境の変化に気づかずこのようにならない為に、国内だけでなく広い視野を持ち果敢にチャレンジすべきである。

*農業競争力強化支援法で、資材価格が低減され肥料商の皆様にもご苦労をかけているが、人口減が続く中で、避けて通れない課題であり、ご理解の上引き続きご協力賜りたい。

*米作平均年齢70歳といわれるが、悲観することはない。10年経てばライバルがいなくなると考えればいい。若い世代がIT等スマート農業を駆使し活躍する場が増える。

何事も明るく前向きに捉えれば道は開けると考えている。

以上